

(6) 児童生徒意識調査結果のまとめと指導改善のポイント

ア 授業への関心・理解度・有用性について

① 知的好奇心を喚起するような授業の工夫

「各教科の勉強が好き」という問いについて、肯定的な回答をした児童生徒の割合は、多くの教科で前年度を上回っている。「各教科の勉強が好き」という意識は、主体的な学習の推進力となる。それぞれの教科の特性に応じて、児童生徒の「知的好奇心」を喚起するような授業の手立てが求められる。そのためには、例えば、授業の導入において、児童生徒と教材との出会わせ方を工夫することや、児童生徒に単元レベルでの学習の見通しをもたせることなどの手立てが考えられる。また、各学校では、児童生徒意識調査における、「算数の授業で公式やきまりを習うとき、そのわけを理解するようにしている」（小学校）、「社会の授業で調べたことをもとに考え、話し合いをすること（討論すること）は楽しい」（中学校）など、教科の学習活動についての設問の回答状況から、児童生徒の授業に対する興味・関心や意欲の状況を十分に把握して指導に当たることが大切である。

② 分かる授業の推進と学習内容の定着を図る工夫

「各教科の授業の内容がよく分かる」という問いについて、肯定的な回答をした児童生徒の割合は、多くの教科で前年度を上回っている。授業に対する理解度は、授業の根幹ともいえる部分であり、「分からない」と回答している児童生徒がいる場合には、迅速かつ適切な対応が望まれる。また、「分かる」と回答しているにもかかわらず、該当教科の正答率の結果に反映されていない場合は、学習内容の定着に課題があると見て、授業内での定着を図る指導の工夫や家庭での学習のさせ方を工夫する必要がある。

③ 活用力を高める指導の工夫

「各教科の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つ」という問いについて、肯定的な回答をした児童生徒の割合は、前年度と大きく変わらない。学習内容に対する有用性は、学校だけの学びではなく、生涯にわたって児童生徒が学び続けていくための推進力となる。児童生徒の「役に立つ」という意識は、普段の授業の中で教師が他の学習場面や他の教科・領域との関連を意識させることや、日常生活とのつながりに気付かせることによって育まれる。平成 27 年度から、県内 22 校で児童生徒の活用力向上研究推進事業が実施されている。このような学校における先進的な取り組み等も参考にしながら、児童生徒の活用力を高め、学ぶことの大切さを実感させることができるような指導の工夫が求められる。

イ 学習活動に関する意識について

① 児童生徒が主体的に学ぶことができる授業づくり

「自分の考えを発表する機会が与えられている」「話し合う活動をよく行っている」という問いについて、肯定的な回答をした児童生徒の割合は、年々増加している学年があるなど、一部改善が見られる。これらの意識は、教師主導の一斉指導だけによらず、多様な学習形態の中で、児童生徒が主体的に学ぶことができているかを把握する指標と捉えている。ここでは、発表する機会や話し合う場面を設定することも大切であるが、そこで、児童生徒が、自分の考えと他者の考えとを比較しながら、話したり聞いたりすることができるような配慮が必要である。ややもすると、分かりやすく説明する、きちんと発表するといった「発信の仕方」を指導することに重点を置きがちであるが、併せて、十分な説明や発表でなくとも、他者の思いをしっかりと受け止めることができるような「受信の仕方」を指導することにも、同様に意を注ぐことが大切である。その上で、平成 26 年 11 月の「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」（文部科学大臣諮問）において示された「アクティブラーニング」とそのための指導方法についての研究を充実させていくことが児童生徒の主体的な学びへとつながると考える。

② ICTを効果的に活用した授業づくり

「電子黒板や大型テレビなどが使われるようになって、今までより授業の内容が分かりやすくなった」と回答した児童生徒は増加しており、教師によるICT機器の活用頻度も増加している。教科等の目標実現のための手立てとして、ICTを効果的に活用した授業づくりを推し進めることで、「分かる授業の推進」「児童生徒が主体的に学ぶことができる授業づくり」に寄与することが求められる。

ウ 家庭での学習について

① 家庭学習の量と質の充実

家庭での勉強時間については、小学5年で年々増加しており、中学3年でも前年度を上回るなど、一部で改善が見られる。また、家庭学習において「自分で計画を立てて勉強している」「学校の授業の復習をしている」といった問いについて肯定的な回答をした児童生徒の割合も、小学6年、中学3年で年々増加するなど、一部で改善が見られる。さらに、「学校の宿題をしている」という問いについても、多くの学年で前年度を上回っている。しかしながら、中学校では学年が上がるにつれて、その割合が減少するなどの課題もある。

家庭学習の習慣化については、小学校低学年からの家庭との連携した指導が重要である。また、多くの児童生徒が宿題にきちんと取り組んでいることから、児童生徒にどのような宿題を課すのかということについては、学校としての研究や教職員間の共通理解が望まれる。宿題の多くは学習内容の定着を図るための復習的な宿題であるが、予習的な宿題を工夫し、その宿題と授業とを意図的に関わらせるなどの手立てをとることで、児童生徒の主体的な学びを創出することができ、更なる学力向上を望むことができる。

エ 学校生活、家庭生活についての児童生徒の意識・実態について

① 学校生活の安定とキャリア教育の推進

「学校に行くのは楽しいと思う」「将来の夢や目標をもっている」という問いについて肯定的な回答をした児童生徒の割合は、多くの学年で前年度を下回っている。また、「学校では落ち着いて勉強することができている」という問いについて肯定的な回答をした児童生徒の割合は、小学5年で年々減少しており、中学1年でも前年度を下回っている。

学校生活の安定は、学力向上の基盤となる事柄であり、全ての児童生徒が楽しく安心して学校生活を送ることができるようにしたいものである。また、キャリア教育の視点からも、将来の夢や目標をもたせることは、学校生活の充実、学力向上につながると考えられる。特別活動や総合的な学習の時間、道徳の時間などの充実を図ることを通して、児童生徒が集団や社会の一員としての自覚を高めたり、自己の生き方を見つめ直したりするなどの機会を大切に指導していくことが望まれる。

② 家庭との連携による家庭生活の安定

1日あたりテレビやビデオ・DVDを2時間以上視聴する児童生徒の割合は、小学6年、中学2年で減少するなど一部に改善が見られる一方で、1日あたりテレビゲームをする時間は小学6年、中学3年で年々増加している。携帯電話やスマートフォンで通話やメール、インターネットをする時間も前年度を上回っており、「持っていない」と回答した児童生徒は前年度を下回っている。「朝食を毎日食べている」と回答した児童生徒は、中学3年を除く全ての学年で減少しているが、「新聞やテレビ・インターネットのニュースを読んだり見たりしている」という問いに対して肯定的な回答をした児童生徒は、全ての学年で前年度を上回っている。

テレビやビデオ・DVDの視聴時間、テレビゲームをする時間が長くなるほど、正答率は低くなる傾向にあることから、家庭において、適正な時間をルールとして設定するなどの取り組みが大切となる。携帯電話やスマートフォンの所持、就寝時間や朝食の喫食については、家庭の協力が得られなければ指導が難しい面もあることから、折に触れて保護者に対しての啓発を図るとともに、家庭との連携を密にしながら取り組んでいくことが大切である。